に掲げた問題に關係して、これらの史料には如何なることが記されて居るか、念の爲にその緊要な點の大略を述べて見よう。

月氏といふ種族は何時からのことかは判然しないが、遲くとも前漢の初め頃には、今の甘肅省の西邊に當る敦煌から祁連山の地方にかけて住み、遊牧生活を營んで居つたが、その東方から漠北に及んで勢力を振つた匈奴種族の爲に侵され、匈奴の老上單于の時代、卽ち西紀前一七四年から一六一年に亙る間の或る年、漢でいへば文帝在位中の一年に、その地方から逃れて今の伊犂地方に移つた。然るにその後舊怨の間柄である烏孫種族の侵略を受けて、何時と正確に定め難いが、またもやこの地を逃げて露領トルキスタンの地方に入り、オクサス河の南方の藍市城今のバルクを都とした大夏の國を從へ、自からは河の北方＝その地も大夏の一部分であつたか否かは別として＝に王庭を作つて止つた。

以上は史記及び史記に據つて書かれた前漢書の上揭諸傳について知り得る所である。たゞ兩書の間に於ける注意すべき相違は、史記大宛傳には大夏の都を藍市城と記して居るのに、漢書西域傳には大月氏＝初め甘肅地方に居つた月氏の大部分は西に移り、小衆はこれと別に南山に止つたので、前者を大月氏、後者を小月氏と呼ぶことになつた次第は更ためて言ふまでもない＝國王の治處を監氏城と記し、大夏については別に都を記してゐないことである。さて

月氏に從へられた大夏には五つの翕侯、卽ち顏師古が漢書張騫傳に註付した所によると、漢でいふ將軍に當るものがあつて皆大月氏に屬した。その名は休密・雙靡・貴霜・肸頓・高附といふた。